

鈴木達也さんを偲んで

越河六郎 ((公財)大原記念労働科学研究所)

労働科学研究

名古屋大学名誉教授鈴木達也さんは、「桐原・労働科学」の第一の継承者でした。労働科学は「人間の労働を最良の状態におく諸条件を研究する学問。生理と心理と衛生などの諸科学の見地から追究する」(広辞苑)とありますが、ここで「桐原・労働科学」という表現をとったことにはわけがあります。桐原葆見先生は「真に合理的な労働と生活の条件を求めてやまない」という信念を通されましたが、その際、何らかの主義・思想に偏することなく、一貫して自然科学的方法論(現実事象の観察)に基づく学問的姿勢をとられたという点に「桐原」を冠した理由です。

鈴木さんが「労働の生産性～桐原葆見の労働科学～」の刊行(労働科学研究所出版部2006年)に際して、序文を寄せてくださいました。「桐原・労働科学」の概要が記されています。以下のとおりです。

「本書は、元労働科学研究所長故桐原葆見先生が生前に「労働の科学」に寄稿された37に及ぶ論説を、「労働の生産性」という表題のもとに編集された桐原葆見論説集である」。

「桐原先生は日本の産業心理学の先駆者であり、また故暉峻義等先生らと共に産業組織の中で働く人々の労働と生活の苛酷な現実と直面し、問題の解明と対応を心身両面の科学の総合的共同研究によって探求する実践的研究を標榜して、労働科学という新しい研究の道筋の開拓に尽力された。」

「この論説集は先生がその生涯を通じて見続けてこられた人間の労働と生活に関わる諸問題を取り上げ所見を述べられたものである。先生がいつも私たちに言われていたことは、労働科学の研究は“まず労働の現場に立って労働の実態をよく観察することから始めよ”ということであった。また観察の視線を働く人間自体に向け、人間を単純に労働力として捉えるのではなく、個性と意志をもった人格として人間性の認識にたつて観察することが先生の基本的な立場であり、本書はその上に立つ論説である。「労働の生産性」という課題に当面して、経営志向の立場から求められることは、最大の生産効率と最大の効果を目指して設備の合理化、機械化、労働力の節約、人間の能力の効果的利用であるが、先生は労働志向の立場から働く人間の人間性を損なわない健全な労働の在り方を求めて、生産性向上のための合理化、機械化の過程における拘束と自由、労働負担の問題、単調作業のストレスや精神的負担、女性労働の問題、職場改革、職場の人間関係、労働意欲、想像力の源泉、仕事と適性、企業内教育の在り方、健全な人造りの問題、作業の安全管理、働く者のメンタルヘルスの問題など、多面にわたって見解を披歴されている。」

「20世紀中葉以降の産業技術の驚異的な発展は、産業労働の態様の著しい変革をもたらし、労働は簡易化され、職場の物理的環境の改善のみならず、家庭の家事労働の軽減など職場や家庭生活をめぐる労働の諸条件の革新によって女性の職場進出も容易になり、さらに自動制御の技術の進展により職場の無人化、ロボットの進化、今世紀にかけての情報機器のめまぐるしい進歩による情報化社会の時代を迎えて、もはやこれまでの労働科学の課題は概ね解消されたのではないかと思われるのである。果してそうであろうか。」



鈴木達也先生

「確かに過去の労働科学の課題であった過重な肉体労働や劣悪な労働環境条件などの問題は大幅で解消されたと言えよう。しかし、それに代わって単純反復作業、作業の高速化、監視作業などに伴う精神的緊張を長時間持続する感覚的、神経的精神労働の負担、単調感、疎外された人間関係、孤独感など心理的ストレスの苦痛、精神的健康を損なうという新しい課題が増加している。」

「また、経営側の立場からは情報化社会における政治、経済、社会の国際化の時代に対応してあらゆる規制緩和を余儀なくせざるを得ない事態となり、終身雇用制、年功序列型の賃金制度なども崩れ始め、競争と効果主義の徹底を志向し、その結果、脱落者のリストラ、非正社員の採用、雇用の不安定、非正社員と正社員の報酬格差、中高年者の失業、自殺の増加など様々な労働社会問題が生じる結果を招いている。」

「このような時代状況において、労働の生産性という問題に取り組むとき、労働科学の課題はなお多く残されている。能率主義、効果主義の徹底だけで問題の解決はできない。」

「桐原先生の論説集は、長い労働科学研究の歴史の中で培われた所見である。一つ一つの論説の中に啓示された見解は時代の移り変わりを越えて今に通じる新鮮さをもって受容されるものと思う。」

現場主義について

桐原・労働科学の研究方法論の基本は、「労働の現場に立って労働の実態をよく観察することから始める」（上記）にあります。この「現場」とは単なる作業現場のことだけではなく「問題の所在」を意味しています。

産業組織心理学会第7回大会（倉敷市）で、「日本の産業心理学の黎明期における 桐原博士の産業心理学研究の軌跡を回顧して」と題して、特別講演をお願いしました。その講演録（「労働の生産性」280～302ページ）のなかで、鈴木さん自身の「現場論」が示されています。

「私は現場体験というのはいかにも大事なことだと思います。作業現場をちらっと見たり、少しも見ないで、アンケート用紙を渡して、反応を求めるといっただけでは、勿論、それはそれなりに意味があるのですが、労働者の生活なり、作業の実態を本当につかむことはできない。やっぱり、作業を直接体験するか、自分が体験しなくとも、とにかく、その現場に密着して、実態を自分の目で見て調査することが、まず基本ではないかと思います」。

労働科学は、掻い摘んでいえば労働負担の研究となりますが、鈴木さんから、その労働負担という言葉を使わないで研究をつづけたらどうか、そうすればまた新しい事実が見つかるかもしれないよ、と、直接論された事がありました。こちらは労働科学研究所に入って30年も過ぎた頃です。大げさに言えば、私にとっては実に強烈な衝撃でした。何気なく使っている用語の中に現場（問題事象）を見逃してしまっている事実気づかされたのです。原著論文等では用語の定義づけは当然のことですが、その際、言葉だけで済ましてしまっていないかという忠告と受けとめました。思い当たるが多々あります。たとえば「単調労働」。これは「当該作業の単調性」という記述で扱うべきことで、一概に、単調労働だからと結論づけてしまうことは安易であり、問題の解明にはほど遠いということでしょう。桐原先生の後、労働科学研究に関してのご指導、深く感謝いたします。

■略歴

- 1913年 10月 広島県生まれ
- 1937年 3月 東京帝国大学文学部心理学科卒業
- 1937年 5月 (財)日本労働科学研究所 研究員
- 1950年 8月 金沢大学講師(法文学部)
- 1968年 5月 金沢大学教授(同上)
- 1968年 10月 名古屋大学教授(教養部)
名古屋大学名誉教授
(財)労働科学研究所客員研究員
日本応用心理学会名誉会員
- 2017年 3月 逝去(享年103歳)